

図書館だより

1989. 1. 26

第10巻4号

通巻108号

Bulletin of the Hokkai Gakuen University Library



雪の通学路

合格祈願

絵と文
國田祐作

永井荷風の日記「断腸亭日乗」を読むと、毎年の始め元日か二日に雑司ヶ谷墓地の「先考の墓」に詣でたことが記されている。よっぽどのことがない限り、それが荷風の新年のしきたりだったらしい。荷風自身の墓も先祖の墓と並んでいる。「永井井吉之墓」と、それだけのあっさりしたものである。

私はこの墓地の近くに長年住んでいたから、散歩のたびに必ずこの中を回り、まちに出るのに通り抜けもした。墓地というと気味悪がる向きもあるかも知れないが、意外に明るいものである。榎の林に囲まれた武蔵野の面影が、都心にここだけ残されている。知った名前の墓を思いがけない所に見つけると、おや、こんな所に、と妙に懐かしい気がする。黒御影の小さい自然石に「夢二を埋む」と彫られている。竹久夢二の墓である。小泉八雲、泉鏡太郎（鏡花）などの墓を探り歩いているうちに、頭の中に案内図が出来上がってしまった。

この静かな墓地に、ある時期から異変が起こった。若い人たち、とくに中学生や高校生が訪ねてくるようになったのである。それも年が明けたあ

たりからである。文人の墓といえ、漱石の墓が威容を誇っているから、それを目当てかと思っていたが、そうではないらしい。大きな肘かけ椅子をかたどった「文献院古道漱石居士」の墓をしり目に、さっさとその一角に入って行くのだ。

彼らが目指すのは「^{おにあざみ}鬼薊清吉」の墓であった。稀代の大盗賊である。一説によれば、清心という寺の小僧が悪事を働いて放逐され、江戸市中知らぬ者なしの大泥棒になったという。歌舞伎では「^{いざよい}十六夜清心」の名題で大当たりをとった。この墓は以前は墓地入口にあったのを、何年か前に中に移したのである。それが試験合格にご利益ありと口伝てに広まったのだ。

「おにあざみ様、お願いします」というたどたどしい文句や、五、六校の名を連ねた「合格祈願」の文字入りの白い布が墓のまわりにぶら下がっている。墓には「武蔵野にはびこるほどの鬼薊今日の暑さに枝葉しほるる」という辞世の句が添えられている。大泥棒捕らえられたは運のツキ、ご利益はやっぱり小者では叶わぬようである。よろしう、おたの申します、と私も頭を下げる。

(くにた ゆうさく 教養部教授)

相互貸借に思う

野口迪子

相互貸借（そうごたいしゃく）という言葉は、図書館を利用する人には、なじみのない言葉かも知れない。「総合対借」係御中という宛名で文献の申し込み依頼をうけたこともあった。一方的に借りる側からみれば、その窓口係をこう呼んでもいいだろう。

図書館用語集（日本図書館協会、1988）によれば、相互貸借とは「図書館間相互協力の一つで、利用者の求めに応じて図書館同士で資料の貸借をすること」となっている。どの種類の図書館でも自館のもつ資料のみで利用者の要求に十分に答えるということは不可能であり、他の図書館の資料を借用し、また自館の資料を貸出しする制度がとり入れられている。

この制度は19世紀後半から提唱され、20世紀に入ってからはアメリカの図書館で論じられるようになった。1916年にはアメリカ図書館協会が相互貸借の規約が作成され、その後1952年、1968年、1980年と改訂され、1970年に出た相互貸借マニュアルとともにアメリカ全土の図書館で広く使われている。Interlibrary Loan Systemとして「ILL」と略して呼んでいる。わが国では1927年（昭和2年）、官立医科大学附属図書館協会（現在の日本医学図書館協会の前身）が当時5館（新潟、岡山、千葉、金沢、長崎）間でこの相互貸借をはじめたことによる。現在では101館の加盟館をもつこの協会は米国国立医学図書館からの資料入手窓口でもあり、現物資料の貸借より文献複写による相互貸借の方が大きな比率を占めている。自然科学・技術系の分野では図書より論文としての文献入手率が高いことと、印刷複写機の発達によって、これらが急速にのびてきたと思われる。

そして、相互貸借という言葉は本来の現物図書の貸借をこえた文献（論文）複写による利用、利用者の直接閲覧へと発展し、相互利用、相互協力

のネットワークとしての重要な基盤をなしたものである。更に、特殊な分野の領域のみに限らず、異種館間、即ち大学図書館と公共図書館、専門図書館、学校図書館とのつながりの基として重要なものである。これがために各図書館では自館のもつ資料の目録を総合的な目録へとコンピュータを使って処理し、オンラインシステムを通して共同利用しようとしているのである。

相互貸借は互惠互助の精神によって行われるといわれてきた。更には、資料の世界的共有ということで他から借りるのは当然という権利意識の考えもでてきた。しかし、自分のところで備えるべきものを備えないで他から借りることだけで生きる図書館は図書館といえない。相互貸借の利用統計は実に詳細で、何回借りたかという数字だけでなく、どんな資料を何回かりたかということで、自館の資料構築を考えなければならない。

資料を借りるということは利用者が自分の図書館にまづ「あるか」を確かめる。「なければいいや」とあきらめるのではなく、研究や学習にぜひ必要という意欲がなければならない。図書館ではこの相互貸借は利用者へのサービスの一ばん大切な活動の一つと考えられる。図書館はかならず資料原報を手に入れるというところに存在の意義があるからである。北海学園大学図書館が英国国立貸出図書館（BLLD）の日本における現物（図書）貸借の窓口になっているということは、利用者サービス活動の重要な役割を担っていることである。図書館はいつの時代でも資料をとおして国際的窓口である。国際交流に一ばんふさわしい図書館を造り育てていくのも利用者のあり方一つによるのではないかと思ってみた。

（のぐち みちこ 教養部助教授）

— 第2回私立大学図書館協会 東地区部会研修会に参加して — 林 公 子

昭和63年度の研修会は、12月8日・9日、中央大学理工学部で開催され、55館55名の出席者によって熱心に行われました。

今回のテーマは『大学図書館におけるパブリックサービスについて』で、その内容は、貸出業務機械化の問題点、文献複写と著作権、相互貸借、大学の地域公開等と盛りだくさんでした。この報告では、その中から相互貸借と地域公開の二点について考えを記して報告とします。

全国491大学のうち北海道には短大を合わせても53校しかありません。他県の例を聴く中で、相互貸借においてもっと緻密な情報ネットワークができるのではないかと感じました。大学図書館の抱えている大きな問題のひとつに、書庫が狭く保管スペースが足りないということがあります。これは利用度が少なくてもアクセスの手段を無くしてはいけない資料を保存し続けなくてはならない為や、利用度の高いものはアクセスしやすい形態で所蔵していなくてはならない為です。このことを相互貸借との関りにおいて考えてみると、資料は共同のものであるという考えにたち、資料の共有化をはかるといふことが必要になると思います。つまり、図書館相互の協力に基づく分担収書・分担保存、共同保存図書館の設立と、自館に固執

(故習)することのない貸借が必要であり、これが図書館だけではなく一般公開へもつながると思います。

以上の事から更に地域公開について考えてみると、座席だけの利用者、不慣れな利用者に応ずる体制がない上、資料が不足している等の問題点も多く、学外者の利用は規定も複雑です。当館でも館長の認めた者、所属機関の紹介状や利用願を提出した者に限り利用を認めているのが現状です。今後は近郊の大学から共通閲覧証を発行をしたり身分を証明できるものがあれば利用を許可する等規定を簡素化し、公開していく必要があると思います。

しかし、大学は公共図書館ではないので、住民の為に本を備える必要はなく、大学本来の機能を発揮して専門の図書を読みたいという研究者に門戸を開くことが大切だと思います。つまり、図書館が利用者を選ぶのではなく、利用者が選びやすいように図書館を公開していく必要があると思います。

今回の研修会では、現場だけでは学ぶことのできない進歩的な知識を得るだけでなく学ぶことができ、参加した意義が私なりにあったと思います。
(本館司書・閲覧係)

展示会へのご招待

前回からスタートいたしました図書館展示会シリーズ第1回「北駕文庫所蔵北海道関係古文書展示会」(9.8~10.8)に引き続き、第2弾といたしまして「昭和24~63年;学園大出版物にみるキャンパス・グラフィティ展」を、図書館1F閲覧室で開催中です。図書館所蔵の学内出版物から、戦後大学創生期から今日までの40年間の学園生の青春像とキャンパス・ライフの変遷を追ってみました。皆様のご鑑賞とご批判をお待ちしております。展示内容の一部は次の通りです。

研究紀要、学園、大学、学生出版物(新聞、団体、部活、ゼミ誌、etc.)
卒業アルバムの変遷:第3期~(S.31.3~),

昭和24~63年;学園大出版物にみる
キャンパス・グラフィティ展
Campas graphyty

第2部卒業記念:第5期~鼻(S.36.3~)
豊平会名簿の変遷(S.29~)
入学案内・入試要項の変遷(S.24~)
学園・大学発行誌、図書館出版物、広報誌「図書館だより」の変遷(S.33.6~)、各種新聞・雑誌、自治会・体育会・文化協議会誌、十月祭パンフレット・テーマ史、部活(クラブ)誌、山岳部冷水小屋らくがき帳、卒論、etc.

尚、展示企画につきましてご意見がございましたら、今後の展示企画の参考にさせていただきますので、図書館カウンターまでお寄せくだされば幸いです。
(ライブ企画)

『世界市場と信用』

梓出版社(1988)

海保幸世

「すごく、つまっているなあ、重たい本だというのが受けとった第一印象です。基礎理論から現代までつなげた大変な力作と、圧迫される想いです」。

これは九州のA教授の礼状の一節である。自著を語れ、ということであるが、一定の客観性をもって語ることが必要であろうと考えて、同じ学会に身を置く他人様にまず小著についての感想を述べていただいた。もちろん礼状であるから外交辞令も含まれている。けれども他の諸先生方もほぼ同様な読後感を寄せてこられたので、さきの一節はあながち外交辞令ばかりでなく、小著『世界市場と信用』にたいする“プロ”の受けとめ方がある程度集約しているといえよう。そしてここに、小著に込めた私たちの意図を読む人々が理解してくれているという確かな感じをもったのである。

私たちは専門書で、なおかつテキストとして使用できるものをつくらうとした。大学の講義は本来、ある特定の時代・短い時期、せまい対象領域に限定されてはならず、しかも質の高さを要求される。さらに、国際経済論は未だ確立した理論体系のない分野であるから、教える者が「通説」的な見解をベースにして、自らの研究成果を取り入れて話さなければならない。これらの諸条件を兼ね備えた国際経済論の書としては、すでに絶版になって久しい故吉村正晴著『貿易問題』(岩波全書)を知るのみである。

ところで、私たちがつねに念頭におくのは、私たちが生きていかなければならない現代社会、すなわち「国際化社会」である。日本経済が世界経済においてその重要性を増すにつれて、日本の産業構造は在来重化学工業の重厚長大型から新鋭重化学工業の軽薄短小型に、第二次産業から第三次産業に転換しつつ、それと軌を一にして、社会の風潮は苦しくとも何かをつくり出す生産的な“マジな”つき合いから、一見“ネアカ”で軽い・本

音を言わない付和雷同的・サービス業的なつき合いに変わりつつあるが、この「国際化社会」

の実体は経済面に限ってみても、日・米・欧・NICs(「NIES」は国家概念を喪失しているので使わない)間の経済摩擦、債務累積問題そして産業の「空洞化」・地域の「空洞化」の急激な展開と深刻化さらに年功序列型賃金体系および年金制度の動揺と崩壊という相当 severe で hard なものである。

このように厳しい「国際化社会」の実体=経済・下部構造を念頭において、学界の諸議論を反映した質の高い水準を維持し、なおかつ講義に使用可能な抽象的原理から現代へ至る内容を盛ろうとすれば、手抜きをしないかぎり、必然的に密度の高い重量感のある著作にならざるをえない。これらを実現するために、また適わないにしてもギリギリまで追い求めることに、三年余の私たちの“産む苦しみ”があった。そして旧帝大の偉い先生が著した書物を周辺の大学が使わせていただくという“本国一植民地”的構図から自立することも秘められた意図のひとつである。

以上がこの小著に書き込めた私たちの思想であるが、その社会的評価は読まれる人々におまかせするしかない。昨秋、出版社から第2刷を要請されるとともに、本書が韓国ならびに中国においても読まれていることを知った。真の「国際化」とは……、やめておこう。

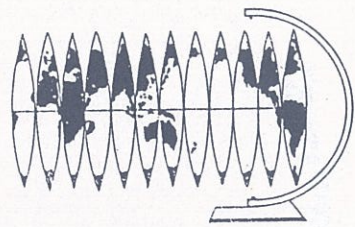
いよいよ危機と私学の時代の到来である。本物だけが生き残れる。書物も人間もそして大学も。

(かいほ ゆきよ 経済学部教授)





ペン大の図書館でのこと



川瀬 雄也

ペンシルベニア大学は、いわゆるアイヴィリーグ大のひとつで1740年の創立である。図書館システムは、一般的な社会、人文科学用のヴァン・ペルト図書館と12の departmental 図書館から成っていて、蔵書数凡そ360万、マイクロフィルム4万6,000本、定期刊行物1万3,000種類という内容をもっている。よく利用したのは、このヴァン・ペルトウォートン・ビジネス・スクールのリッピンコット図書館である。ヴァン・ペルトは、その前庭のペン大の創設者でもあるベンジャミン・フランクリン像と向い合い、美しい木々と芝生をもち、遠く市街中心部に、これ又フィラデルフィアの重要人物ウィリアム・ペンの像を臨める落ち着いた環境にある。入館にはIDカードの掲示が求められる。検索は端末が40台程置いてあり、そこでチェックするか、カードで調べるか、reference diskで相談するか、ほぼ完全開架式なので自分で書庫に入って捜すかする。reference diskでは本学図書館の如く？！ 実に親切に、納得のいく迄相談ののってくれる。この欄で再三紹介された如く、利用時間は長い。月～木は8:45am～0:00am、金8:45am～10:00pm、土10:00am～8:00pm、日0:00pm～0:00am、時に、一部の利用室は2:00am迄といった具合である。5Fのアジア・コーナーの一角には日本コレクションがあり、古文書、雑誌から童話桃太郎迄、やや雑然ながら、よくまあと思う位揃っている。とにかくシステムは、いかに利用し易くするかの配慮に富んでいるといえよう。図書館を出る時は、出口で多くはアルバイトの院生等が、カバンの中迄覗き込んでチェックをしている。しかし、例えば同じクラスに出ていると分かると大目に見てくれたりする。スタッフ、院生ばかりではなく図書館では色んな人々と知り合う機会を得、今は懐かしい思い出である。頭の禿具合から(禿具合が客観的分類基準

になりうるのか、自信はないが、当時は感覚的にそう思った)きっと日本人だろうと思っていた人が朝鮮人のH氏で、彼は実に物静かな紳士で、爾来やれ利根川進がノーベル賞をもらったとか、竹下内閣が成立したとか会う度に日本のニュースを教えてくれた。オランダ人のP氏には、特技があった。図書館内は勿論禁煙、No food, No beverageであるが、昼になるとさっと飛び出し、屋台からいわゆる junky foodを買って来て食べ始め、見回りの掃除のおばさんの来る5分前には、見事に食べ終え何事もなかったかの如く机に向うのである。ロシア人のS氏は「アメリカ人は、いつもロシア人を悪くいう」というので「日本でも評判はよくない」というと小1時間程も得意の専攻の哲学用語や概念を持ち出し弁明にこれ努めるので workshop に遅れてしまった。知り合いになってから会うと必ず両手で握手をし、まず同志！ という。米国迄来てロシアの同志にされるとは思いもよらなかった。彼はペレストロイカに期待していたが、一度だけ祖国を悪く言った事があった。それは彼は新婚なのだが、亡命を恐れてか夫婦同時出国は認められず半年後に奥さんの渡来が延ばされた事である。彼が奥さんの写真を見せてくれたが、アンナ・カレーニナもかくありやという美人で、「美人じゃないか」というと得意気に「勿論だ」といって、じっと写真に見入っているうち、思い胸にせまるものがあったのであろう、みるみるその蒼眼が潤んでくるのが分かった。旅の情けか、人の情けか、そこで思わず叫んでしまった。「同志！ 半年なんてすぐたつ」と。

(かわせ ゆうや 経済学部教授)



図書館に 思うこと

法学部法律学科4年 氏 家 まどか

大学生活も間もなく終わろうとしています。この4年間、本当に多くの時間を大学図書館で過ごしてきました。特に3・4年生とお世話になった現在の図書館は、私にとって非常に魅力的な存在でした。それまで利用していた旧図書館も古いなりになじみ深さや落ちつきを感じさせてくれる良さがありましたが、少々うす暗く、冬はページをめくる指先が冷たく思えることもしばしばありました。

ですから、3年生の春、新図書館の入口に「開館」の札を見た時のうれしさ、段階を昇って行く時の期待感はとても大きなものでした。出来上がったばかりで、まだよそゆきの表情を見せる図書館の棚に並んでいるたくさんの本をわくわくした気持ちでみつめていたのは、私だけではなかったと思います。

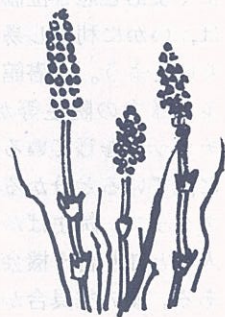
それから2年間、私は何度も図書館のドアを開けました。ある時は試験勉強のために、ある時はゼミの下調べのために、またある時はなんとなくひと息つきたくて。

ふりかえりますと、この「なんとなく」が一番多かったように思います。試験もすんだし、今とりたててしなければならぬこともないという時、私はよく3階の閲覧室に本を探しに行きました。社会史や産業史、エッセイ、小説、詩、絵画など様々な分野の中からその日の気分にあった1冊を選び、陽の光がたっぷり入る窓のそばで読むのです。広い窓からは、野球やサッカーに興じている人達が見えることもあります。私にとっての本が彼らにとっては野球やサッカーなのだと考えると「お互い好きなことを自由にやれて幸せだね」と声のひとつもかけたくくなります。

2階の雑誌コーナーもよく利用しました。私は雑誌が大好きで、読む範囲も広く、毎月かなりの額を費やしていたのですが、とても買いきれぬものではありません。今は図書館で読めるなと思う

ものは買わずにすませています。種類は豊富ですし、横に長く並べられているのでどれを読もうかと見渡すのも楽です。保存したい記事はコピーしていけばよいのですから、本当に助かります。器ばかりが立派で中身のない図書館は困りものですが、私達の図書館は蔵書が充実しているだけではなく、次から次へと発行されては消えていく雑誌にも気を配り、それらを読む私達をゆったりと受け入れてくれる見事な器を持っているわけです。

学生なので、図書館は専ら勉強のために利用しなければいけなかったのですが、卒業を控えた今思いかえしますと、このようにふらりと立ち寄って読んだ本の方が強く記憶に残っていたり、読んでいる自分の姿を思い浮かべたりすることがあったりして、不思議な感覚を覚えます。何に追われることもなく自分自身にゆとりのある中で読んだせいでしょうか。だとしたら、これから社会人として暮らしていく日々の中でどれだけそんなゆとりのある時間を持つことができるでしょうか。卒業したら、もうこのようにすべてを受け入れてくれる図書館はありません。今度は私が私を育ててくれる図書館をつくりあげていかなければならないのでしょうか。無意識のうちに自分の中に大きな世界をためこんでいけた時間が過ぎてしまったのだと思うと、少し怖いような気がします。しかし、同時に期待感もあるのです。初めてこの図書館を訪れた時のように。



朝、はやい人は9時前から薄暗い廊下でじっと開館を待つ。一人二人のみではない。多い時には10名前後の人が図書館が開く9時30分を待つ。図書館が現在の場所になってから学生も利用しやすくなったのではないだろうか。さらに旧図書館よりも広く明るくなった閲覧室では、公務員の勉強する人、約300冊近くある雑誌を読む人等。試験前となると多くの学生でごったがえす。コピー機の前には長い列ができ試験の情報が飛びかう。図書館がもっとも活気があるのはたぶん試験前だろう。ただもしも静かに勉強したいと思うならやはり、試験前はさけた方がいいかも知れない。

1階ではいつも誰か彼か新聞を読んでいるため朝にきちんと整理されている新聞は午後になると所定の場所にはもうない。1階は2・3階と違い飲食が禁止されていないので、コーヒーを飲みながら話し込んでいる人々や、授業の前に急いで辞書を開く人もいる。ちょっとした時間に使いやすい場所である。

3階では、又、違った雰囲気がある。何時間も続けて勉強している人が多く、すこし疲れた目をして、グラウンドの高校生の体育を見下ろしていたり、午後の光をあびてうたたねしている人もいる。他大学の教授が資料を読んでいたたりもする。5講目が終了したあと夕焼けを見に行くロマンティストもいた。2階と比べ学生が少く(もっとも試験前は例外だが)友達との待ち合せ場所としている人もいる。

図書館というと堅苦しく、敬遠されがちだが、大学生ともなると教科は専門化し、必然的に図書館にたちよらざるを得なくなる。この点でいえば学園の図書館は、2階と3階に本がまず分離されているため実際的に本が探しやすくなっている。本棚の高さも一番上は何とか手の届く高さで、本が比較的ゆったりと並んでいるため利用しやすい。

図書カードは、分類、著書名、件名別にそれぞ

れ分類されている。実際に本を手にとって調べたい本を捜す事より、カードの方が探しやすいので、カードに慣れるのもいいかも知れない。

夕方になると雑誌コーナーでは、インテリアランプが灯り、くつろいだ雰囲気になる。時計を気にしながら資料を読むのに余念がない人や、コピーをあわててとる人もいる。午後7時45分頃、司書の人が、貸し出す手続きを忘れない様に注意し、8時、図書館は閉館となる。

ところで、新図書館ができた時、“返本台”なるものが設置された。これは学生が、図書館内で読んだ本をもどす台であるのだが、一定時間たつと決して少なくない本が台につままれており、司書の人も大変だろうと心配したくなる。しかし、分類されている本が、うっかり違った棚にまぎれてしまい、それを直すほうが大変なのだろうか。学園でも司書の資格をとることができ、聴講生として社会人も多く来ている。計画的に講義を受けると在学中に楽にとれるので興味のある人は考えてみてもよいだろう。

図書館を利用させていただいている学生の一人として、学生一人ひとりの図書館に対するモラルの向上により、図書館がもっと学生に身近になる様に期待します。



新着図書(選)一経済

- 日本資本主義の発達と私法 福島正夫著 東京大学出版会
- 国際経済法 丹宗昭信〔ほか〕編 青林書院
- 入門経済学 伊東元重著 日本評論社
- 新講経済学 森 茂也著 同文館
- 産業構造と消費構造 一理論と実証一 時子山和彦著
- 経済の法則を求めて 近代経済学の群像 柴田敬著 日本経済評論社
- 経済学説と精神史の間 プラトンからミルへ 内田忠寿著 東海大学出版会
- 資本論と現代資本主義論 姫野教善著 創成社
- 需給を超えて 制度派経済学の再評価 ジョン・S.ギャムズ著 佐々木晃〔ほか〕訳 多賀出版
- 実践ゼミナール日本経済 正村公宏著 東洋経済新報社
- 日本経済史 守本順一郎著 未来社
- アフリカ経済史 一1800—1960— A. J. F. マンロー著 北川勝彦訳 ミネルヴァ
- 入門世界経済 一日本からみた世界の動き— 丸茂明則著 中央経済社
- 経営と人間 市原〔季一〕ゼミナール研究会編 森山書店
- 野口祐教授還暦記念論文集 一現代企業における技術と経営の展開— 森山書店
- 企業経営と会計の新展開 阪本安一 西 賢祐編著 同文館
- 経営学論要説 井上 薫著 晃洋書房
- 住友財閥成立史の研究 畠山秀樹著 同文館出版
- 経営基本管理 藤芳誠一著 泉文堂
- 人事管理入門 後藤敏夫〔ほか〕著 学陽書房
- 協同組合論の新天地 一もう一つの可能性— 農林中金研究センター編 日本経済評論社
- 経済性工学の応用 一採算経営の計画技術— 千住鎮雄, 伏見多美雄著 日本能率協会
- 現代金融論 芹澤数雄著 中央経済社
- 投資と金融 一資本主義経済の不安定性— H. P. ミンスキー著 岩佐代市訳
- アメリカの金融市場と構造 藪下史郎著 東洋経済新報社
- アメリカの預金金融機関 一変革期の金融制度 1986—87— C. H. グレムベ D. S. ホーランド著 馬淵紀壽訳 金融財政事情研究会
- 朝鮮銀行史 朝鮮銀行史研究会編 東洋経済新報社
- 庭田範秋博士還暦記念論文集 一新時代の保険— 真屋尚生 石田重森編著 千倉書房
- 公共経済学を求めて 宇沢弘文著 岩波書店
- 現代財政理論 今西芳治〔ほか〕著 世界書院
- 税制改革 一その軌跡と展望— 藤田 晴著 税務経理協会
- 租税法 一理論と政策— 村井 正著 青林書院
- 財政学 坂入長太郎著 酒井書店
- 現代アメリカ労働史論 小林英夫著 啓文社
- 日本産業論 木村敏男著 法律文化社
- 現代アメリカ産業論 W. アダムス論 金田重喜監訳 創風社
- 国際会計基準 一日米英会計基準との比較解説— 稲垣富士男編著 同文館
- 現代の会計原則 加藤盛弘著 森山書店
- 現代会計制度論 村瀬儀祐著 森山書店
- SHM 会計原則解説 阪本安一編著 税務経理協会
- 簿記通論 今井信二著 千倉書房
- イタリア経済学抄史 一発端よりフランチェスコ・フェッラーまで— G.-H. プスケー著 橋本比登志訳 嵯峨野書院
- 現代企業総論 上林貞治郎著 森山書店
- 経営管理の論理と課題 大石岩雄〔ほか〕著 秀学社
- マネー・インフレ・大恐慌 一景気循環の分析— R. バトラ著 篠原三代平監訳 東洋経済新報社
- 新国際金融事情 近藤健彦編著 財經詳報社
- 国際分散証券投資 一拡大する投資フロンティア— 大和正典編 有斐閣
- 会員制度の基準 一シュマーレンバッハにおける計算論の意義— 齊藤隆夫著 森山書店
- 会計理論の展開 一会計学的観点と会計学的思考— 酒井文雄著 森山書店

新着図書(選)―法律

- 田辺元の思的研究 ―戦争と哲学者― 家永三郎著 法政大学出版局
- 西本願寺寺法と「立憲主義」 ―近代日本の国家形成と宗教組織― 平野 武著 法律文化社
- 猪木正道先生古稀祝賀論集 ―現代世界と政治― 世界思想社
- 政治思想論集 ―付カール・シュミット論― C. シュミット著 服部平治 宮本盛太郎編訳 社会思想社
- 政治哲学序説 南原 繁著 岩波書店
- 天皇と戦争責任 児島 襄著 文藝春秋
- 国会と選挙と国民 盛 秀雄著 啓文社
- 選挙報道と投票行動 ―1986年7月衆参同日選挙の調査研究― 東京大学新聞研究所編 東京大学出版会
- 情報公開 ―利用の仕方ひとつで、もっと世の中いろいろ見えてきます― 秋山幹男〔ほか〕共著 学陽書房
- アメリカ革命 有賀 貞著 東京大学出版会
- 法窓さろん ―くつろいだ法律家たち― 1-6 日本法律家協会編 法律文化社
- 現行人民共和国六法 1, 2 中国綜合研究所・編集委員会編 ぎょうせい
- 現行韓国六法 法務大臣官房司法法制調査部職員監修 ぎょうせい
- 法と市民 伊藤護也〔ほか〕著 法律文化社
- 現代法を学ぶ 中川 淳編 法律文化社
- 法学原理 沢木敬郎, 荒木伸治著 北樹出版
- 法社会学方法論の検討 ―現代経験主義法学の批判的検討を中心として― 伊藤護也著 法律文化社
- 近代憲法における主権と代表 渡辺良二著 法律文化社
- 憲法学と憲法 山下威士著 南窓社
- 日本国憲法 長尾一紘著 世界思想社
- 演習ノート憲法 浦田賢治編 法学書院
- ドイツ憲法思想史 C. F. メンガー著 石川敏行〔ほか〕訳 世界思想社
- よくわかる行政法 木藤静夫著 公人社
- 現代アメリカ社会と司法 ―公共訴訟をめぐる― 大沢秀介著 慶応通信
- 近代私法学の形成と現代法理論 原島重義編 九州大学出版会
- 図でみる民法 ―総則 物権 債権 親族・相続― 鹿毛継雄著 週刊住宅新聞社
- 民法の考え方と学び方 千石 保著 日本加除出版
- 小林三衛先生退官記念論文集 ―現代財産権論の課題― 敬文社
- 演習ノート民法総則・物権法 三和一博編 法学書院
- 不動産媒介契約の法律紛争 丸山英気〔ほか〕著 有斐閣
- 不動産民法 尾浪正雄〔ほか〕著 週刊住宅新聞社
- 不動産判例集成・売買 菅生浩三編著 清文社
- 借地権と補償 竹村忠明著 清文社
- 演習ノート債権総論・各論 石川利夫編 法学書院
- 実践に学ぶ緊急時の債権回収 森井英雄著 商事法務研究会
- 契約の成立と責任 円谷 峻著 一粒社
- 演習ノート 親族法・相続法 小野幸二編 法学書院
- 相続法講義 鍛冶 良堅著 啓文社
- 演習ノート商法総則・商行為法・保険法・海商法 稲田俊信編 法学書院
- 商法総則・商行為法概説 近藤龍司著 中央経済社
- 商法総則要論 坂井隆一著 法律文化社
- 特別清算手続の実務 才口千晴, 多比羅誠共著 商事法務研究会
- 演習ノート手形法・小切手法 堀口 亘編 法学書院
- 注解特別刑法7 ―風俗・軽犯罪編― 青林書院
- 演習ノート民事訴訟法 飯倉一郎編 法学書院
- 全裁判官経歴総覧 日本民法法律家協会司法制度委員会編 公人社
- やさしい民事執行法 飯倉一郎著 法学書院
- 民事執行法講義 小室直人編著 法律文化社
- 家事審判事件の研究 1 沼辺愛一〔ほか〕編集 一粒社

ゼミナール刑事訴訟法 上, 下 小田中聡樹著
有斐閣
演習ノート刑事訴訟法 高窪貞人編 法学書院
アメリカ陪審制度研究 ジュリー・ナリフィケ-
ションを中心に 丸田隆著 法律文化社
現代経済法入門 丹宗昭信 厚谷 襄児編 法律
文化社
Q & A 著作権入門 播磨良承編 世界思想社
現代国際法諸説 清水良三著 酒井書店
国際海洋法序説 布施勉著 酒井書店
日本の国際法事例研究 2 一 国交再開・政府承
認一 国際法事例研究会著 慶応通信
演習ノート国際私法 木棚昭一編 法学書院
労災補償と損害賠償 西村健一郎著 一粒社
労働組合法講話 本多淳亮著 青木書院
演習ノート労働法 高橋 保編 法学書院
日本森林行政史の研究 一 環境保全の源流一 西

尾 隆著 東京大学出版会
証券取引の法理 神崎克郎著 商事法務研究会
事故と保険の構造 一自動車事故の抑止と補償の
理論一 吉川吉衛著 同文館出版
フレップ行政法 原田尚彦著 弘文堂
英国公益信託法の研究 富沢輝男著 湘南堂
現代商法入門 蓮井良憲 平田伊和男編 法律文
化社
督促(支払命令) 手続の実務 深沢利一著 新日
本法規出版
告訴状・告発状モデル文例集 水野 基著 新日
本法規出版
現代労働法入門 窪田隼人 横井芳弘編 法律文
化社
労働時間と法 野沢 浩著 日本評論社
そこが「知的所有権」違反です 一知的商売にか
かわっている人へ一 中経出版

新着図書(選)一工学

伊能忠敬 大谷亮吉著 名著刊行会
ゼンリンの住宅地図 1988 札幌(7区) ゼン
リン株式会社編 (同編者)
理工学系大学院案内 1988年度版 東京図書株
式会社編集部編 東京図書
日本アルマナック 一現代日本を知る総合デー
タバンガー 1988 教育社
FORTRAN-77による科学技術計算サブルーチ
ンライブラリ 黒瀬能幸〔ほか〕著 啓学出版
地球大紀行 一NHK一 別巻1, 2 日本放送
協会〔NHK〕取材班〔ほか〕著 日本放送出版
協会
日本の技術 100年 一ビジュアル版一 1. 資源
エネルギー 向坊 隆〔ほか〕監修 筑摩書房
鉄筋コンクリート工学演習 岡田 清〔ほか〕著
鹿島出版会
日本下水道史 行財政編, 技術編, 事業編 上,
下 日本下水道協会下水道編さん委員会編 日本
下水道協会
MS-DOS入門 石田晴久著 岩波書店
MS-DOS 頼頼一起, 鷹野 澄著 共立出版

マンガ「一太郎」Ver.3.0 大研究 佐倉正義絵・
文 日刊工業新聞社
「花子」活用プログラミング 300題 田中 廣著
日刊工業新聞社
水墨美術大系 1-15, 別巻1, 2 飯島 勇〔ほ
か〕編 講談社
よくわかる花子のQ & A教室 新長輝則著 井上
書院
シールド工法・推進工法選定比較マニュアル 中
本 至編 近代図書
世界建築事典 J. フレミング著 鈴木博之監訳
鹿島出版会
鉄筋コンクリート造積算入門 はまだかんじ著
大成出版
新体系土木工学5 一連続体の力学一 技報堂
Macintosh 西林瑞夫著 共立出版
MS-DOS入門 石田晴久著 岩波書店
建築工事の積算 建築工事積算研究会編 経済調
査会

新着図書(選)一教養

- 情報社会の図書館 丸山昭二郎〔ほか〕著 丸善
 図書館情報学ハンドブック 図書館情報学ハンドブック編集委員会編 丸善
 図書館選書 1-6, 11, 15 1. 貸出し 2. NDC入門 3. 図書館とコンピュータ 4. 蔵書構成と図書選択 5. 逐次刊行物 6. 洋書目録法入門つくり方編 11. 子どもの図書館の運営 15. 図書館施設を見直す 日本図書館協会
 情報と文献の探索 -参考図書の解題- 長澤雅男著 丸善
 日本学術資料総目録 1988 美術工芸篇, 書跡・典籍・古文書篇 市古貞次〔ほか〕監菜 朝日出版社
 マクミラン聖書歴史地図 Y. アハロニ M. アヴィ=ヨナ著 池田 裕訳 原書房
 イスラエルに見る聖書の世界 新約聖書編 ミルトス編集部編 ミルトス
 「文藝春秋」にみる昭和史 1~3 文藝春秋編(同編者)
 世界各国要覧 -最新- 4訂版 東京書籍
 フランス人 1 T. ゼルディン著 垂水洋子訳 みすず書房
 マンガ日本経済事典 日本経済新聞社編 北原修, 酒井ゆきお画
 現代日本人のライフコース 森岡清美 青井和夫編 日本学術振興会
 社会心理用語事典 岡堂哲雄編 至文堂
 日本アマチュア天文史 日本アマチュア天文史編集会編 恒星社厚生閣
 キャット・ウォッチング -ネコ好きのための動物行動学- 1, 2 D. モリス著 羽田節子訳 平凡社
 エイズ -手をつないだ位では感染しない- N. de サンラール著 大宅映子訳 グラフィック社
 瀬戸大橋 -全記録- 山陽新聞社編(同編者)
 危険な話 -チェルノブイリと日本の運命- 広瀬 隆著 八月書館
 日本の名酒 稲垣真美著 新潮社
 なぜ世界の半分が飢えるのか -食糧危機の構造- スーザン・ジョージ著 小南祐一郎, 谷口真理子訳 朝日新聞社
 抽象への道 -オノサト・トシノブ画文集- 新潮社
 現代の水彩画1-5 龍 悌三〔ほか〕編 第一法規
 日本の彫刻 1 -飛鳥・奈良- 土木 拳著 美術出版社
 朝鮮名峰 白頭山金剛山 久保田博二写真集 岩波書店
 現代デザイン事典 1988 勝井三雄〔ほか〕監修 グッドデザイン 1987-1988 日本産業デザイン振興会編 学習研究社
 写真万葉録・筑豊 上野英信 趙根在監修 葦書房
 アウトドア教本 1-4 BE-PAL編集部編 小学館
 文字の起源 K. フェルデシ=パップ著 矢島文夫訳 岩波書店
 四字熟語の読本 尚学図書・言語研究所編 小学館
 日本語になった外国語辞典 飯田隆昭 山本慧一編 集英社
 学術論文の技法 斉藤 孝著 日本エディタースクール出版部
 まんがで学ぶ中国語 黒沢秀子 楊 立明著 東方書店
 D F S フランス語法辞典 -使える基本単語800- P. セレリエ J=p. マヤール著 西村牧夫 F. V. 尾上訳 白水社
 [白水社] ポーランド語辞典 木村彰一〔ほか〕共編 白水社
 マザーグースのカレンダー -歌でつづる12カ月- 藤野紀男著 原書房
 新潮日本文学辞典 新潮社辞典編集部編 新潮社
 写真花万葉集 杉本苑子, 相馬 大著 浅野喜市写真 光村推古書院
 田辺聖子の小倉百人一首 [正], 続 田辺聖子著 岡田嘉夫絵 角川書店
 パナマ運河の殺人 平岩弓枝著 角川書店
 遠い海から来た COO(クー) 景山民夫著 角川書店



北 駕 文 庫 其 の 四

古 文 書 解 題 地 震 預 防 説

早 川 和 夫

4 地震預防説

安政3年(1856),当時の翻訳者宇田川興齋は,1844年にオランダで出版されたネーデルランツェ・マガセインを入手し,これに掲載されていた地震預防説に興味を持ち,訳出したのが本書であります。

漢字と平かな交りの翻訳文はB5版縦書き和とじて合計30頁に及んでいます。今回は当時の人達が地震をどう考えどうやって預防するつもりだったかをこのオランダ書(蘭書)を通して考えてみたいと思います。

現代の地震学は地震発生の原理は岩盤(プレート)同志の圧縮による歪(ひずみ)が極大に達し,ついに岩盤は破壊すると考えます。その時発生する弾性波が地殻に及ぼす振動現象を地震と呼びます。これが現代の岩盤理論(プレートテクトニクス)であります。

現代の地震学はこうした考えで進められていますが,日本では古来より地下にはナマズが住み,これが活動すると地震が起きると考えたりしました。宇田川訳のオランダ書ネーデルランツェ・マガセインによると,流石にヨーロッパではナマズのような動物は持ち出さず純粋に科学的手法による地震説を考えています。

このオランダ書の説く地震説は越列幾の兒(エレキテル)説であります。すなわち地震は地中に鬱伏する電気より発するもので,この時大気は令節を失い,雷電が雲中より起ると説くものであります。従ってエレキテル(電気)の法則を理解すれば,自然に地震を預防する術はきまるとオランダ書は説いています。訳文中大気は令節を失うというあたり,何となく人間臭い訳文ではありませんか。さて地震預防法を考案したのはフランスのモン

トペルリルの大学理学者アルト・ベルトロン氏でした。彼は20年前フランクリン氏の発明した避雷針に倣って地震を預防する術を考案しました。彼は地震は地下70里に発し,円錐状に爆炸の勢が開き,地上では直径100里を震盪すると考えました。また地震の伝わる速さ(地震波速度のこと)は1秒に5里以上で,ヨーロッパ全土は100秒時で激震を覚えると計算しています。

さてベルトロン氏は地震はエレキテルのなすわざであるから,地中にたて穴を掘り巨大な避雷針のようなものを作り,地中のエレキテルをこれに集めて地上に導き,空中に放出中和させれば地震は預防できると説きました。

このため地中に多くのたて坑を掘る必要があります,巨萬の金貨を必要としますが,地震により失う財貨にくらべれば,大した額ではないと結んでいます。

5 その他の科学書について

今まで解説しましたのは北駕文庫中の科学書964冊中の僅か3冊にしかなりません。

列挙しますと,雲根志(岩石鉱物ハンドブック)が図書館だより1988年7月1日号,天経或問(天文学入門)が同年11月1日号であります。それに今回の地震預防説の合計3編であります。

解説はしませんでしたが,注目すべき古書として本草綱目(植物・鉱物図鑑)や塵劫記(和算書)がありますので,別の機会にご覧に入れたいと思います。いずれにせよ,北駕文庫の科学書は日本の科学史を学ぶものにとって北海道唯一の貴重な文献であるに違いありません。

(はやかわ かずお 工学部教授)

